

性とセクシャリティの  
とりどり  
に寄せて  
にじいろBiwako

## 9. 多様な性のあり方とスポーツ

NPO法人にじいろBiwako  
理事 せきめぐみ



みなさんはスポーツが好きですか？私はスポーツが好きではないのですが、大学でスポーツをジェンダーの視点から研究しています。「体育会系男子」のノリが苦手…というところから研究の道に入った私は、男子運動部で活躍している「女子マネージャー」の存在に興味を持ち、今はLGBTQ+の人々の体育経験なども調査しています。

多様な性のあり方とスポーツは、どのように関わるのでしょうか。少しだけ、体育の調査結果をご紹介します。大学1年生約1,000人にアンケートを実施したところ、体育での嫌な経験が「よくあった」と回答した人は、LGBTQ+ (20.0%)、女性(8.8%)、男性(7.1%)の順に高いことがわかりまし



◀「Physical Education & Gender Politics 研究プロジェクト」の詳細調査結果はこちら

「体育嫌い」の背景にあるジェンダー

た。そして、「ときどきあった」という回答を合わせると、LGBTQ+55人中32人(58.2%)が嫌な経験をしていました。

その内容を尋ねたところ、「同性間でゲイであることを理由にいじめられていたので、体育の時ペアで体操をするときなどは苦痛でした」(ゲイ男性)や、「男だからスポーツが得意、力が強くないといけないという感じで、(自分は)全く体を動かさなかったので色々言われることはあった」(トランスジェンダー女性)など、男女別の授業や性教育の不足、教員や同級生たちから男らしさを求められることなど、さまざまな学校体育の課題が見えてきました。

身体のあり方やその使い方を含め、「女(男)」とはこういうもの、こうあるべき、という見方こそがジェンダーなのです。そう考えると、人間の性は「女」「男」の2種類だけであり、男女別に体育やスポーツをすることが当然のように思われている現在のスポーツのあり方こそ問われたいといけないのではないでしょうか。スポーツをすることを避けている私は、健康のために歩くことから始めます！